



震央分布図
2008年
12月 1日
〜
12月31日

マグニチュード
○ ≥ 5
○ ≥ 4
○ ≥ 3
○ ≥ 2
○ < 2

地震数
278回

気象庁・大学・
防災科学技術研
究所の資料を基
に作成

阪神・淡路大震災があればほどの大災害になった要因の一つに、多くの方が、関西では大地震は起こらないと思われていたことが挙げられます。起こらないものに備えはできません。関西より関東の方が有感地震がずっと多いことが背景にあると思いますが、有感地震が多いからといって被害を及ぼすような大きな地震が多いとは限りません。

一番危険なのは、兵庫県南部地震や、琵琶湖西岸断層帯などで起こるといわれている内陸の浅いところで起こる地震です。一方、関東では、沈み込むプレートに関係した深い地震が多いのです。

内陸の大地震は、プレート境界の巨大地震の前後に集中して発生します。関東ではプレート境界の巨大地震は200年に一度程度なのに対し、南海トラフ沿いの地震は100年に1度程度発生します。しか

も、前回の活動から、すでに60年程度経過しています。

関西地方や西南日本は地震の活動期に入ったと言われていますが、前回の活動では、1943年鳥取地震や48年福井地震などでおよそ1万人の方が亡くなられています。東南海・南海地震の約4倍です。

関西では、今後数十年の間に内陸の浅い地震が必ず起こると思って、日ごろから備えることが重要です。2階建ての家なら2階で寝る、家具を固定するなど、できることから始めることが重要です。山間部では地震の揺れによる被害より、地すべりや土石流の被害が大きい場合が多いです。そのような恐れがあるところでは、大きな揺れが来たら、安全なところへ一刻も早く逃げる心構えを日ごろから持っておくことが必要です。

(飯尾能久京都大防災研究所地震予知研究センター教授)

阪神・淡路大震災から14年